

V 研究開発の成果

学習分野 ことば部 21年度 成果と課題

(1) 成果

「対話力」「語彙力」をどのように評価するかのものさしが見えてきた。

- 学び合いの中で、お互いの表現の場、お互いを生かす場を作ることができたかどうか
- 対話の目的が子どもに内面化されているかどうか

この2つをあげたのは以下のような成果が考えられるからである。

① 「どれだけ聞けているか」が公共性のバロメーターであることが確認された

対話はライブである。その時その時の状況に応じ判断し、言葉を選び使っていく。音声言語の場合でも、文字言語の場合でも、相手がいるということを意識し、相手を尊重する力をつけないといけない。聞き合うのが楽しいという雰囲気や何を言っても許される学習環境作りが必要となる。聞くことを鍛えることが大切。聞き手を育てることがポイントとなる。

② 対話力(学び合い)をより意識するようになったのではないか

わからなさから出発する学び合いができるようになり、わからないことを話し合いの中で学ぶ楽しさが見られた。対話する中で、相手の発言を引き出すような質問が見られるようになってきた。話し合いをするときには、何のための話し合いであり、どういう形で収束していくのかという見通しが立っていると、子どもはなんとか折り合いをつけていく。(合意の着地点が見える)

③ 語彙力は対話の中で育まれる

子どもたちは話し合いを(対話)する中で、相手とつながるためのことばを探し、自分の思いをびったり表すことば探しをする(語彙力)ようになってきている。自分の思いを言語化して相手に伝えなければいけないということが学習の中で意図されていることが大切である。

(2) 課題

① 子ども同士が評価をし学び合いをすることは難しい

子どもが子どもの目線で評価するのは難しく、教師のジャッジに流れてしまうことも多い。子ども同士の学び合いのためには、教師は「あたたかい無表情」であることが必要ではないか。一方で「よく気づいたね」という評価は大切である。

② 子ども同士の学び合いのための教師の出番はどこかを探ること

話し合いの根拠を全員で共有させることや、立ち止まらせ、言葉に着目させることは、ともにつくる学習の中で大切な教師の役割である。どこで立ち止まらせ、どの言葉に着目させるかを吟味していくことは課題である。

③ 「公共性」育成のプランを完成させること

それぞれの項目が「対話力」「語彙力」とどう結びついているのかを具体的に示していきたい。またそれぞれの領域の中で、具体的な活動例をさらに吟味してあげていく。

「市民」で育む「公共性リテラシー」とは、(1)社会的価値判断力、(2)意思決定力、(3)社会を見る3つの目の3点で、これら涵養の程度を、形成的評価の指標に踏み込んで考察することが課題である。

(例) 子どもの学びの様子 5年生「食糧生産のこれから」の「意思決定をおこなう場面」から

【場面設定】…「自給率を上げるために、転作地で何を栽培すれば、一人でも多くの国民（生産者も消費者も）が幸せになれるのか」という意思決定場面での子どもたちの反応は、以下の通りである。

自分の考えを書いた 第一次意思決定場面	他者の考えを聞き考え直した 第二次意思決定場面	自分の考えを書いた 第一次意思決定場面	他者の考えを聞き考え直した 第二次意思決定場面
(1)大豆 ……………15名	⇒⇒⇒10名	(7)飼料用米 ……………1名	⇒⇒⇒0名
(2)大豆・飼料用米を 輪作する ……………4名	⇒⇒⇒16名	(8)トウモロコシ ……………1名	⇒⇒⇒0名
(3)大豆+トウモロコシ …1名	⇒⇒⇒0名	(9)何でも好きな物 ……1名	⇒⇒⇒0名
(4)大豆+麦 ……………1名	⇒⇒⇒0名	(10)補助金を増やす ……1名	⇒⇒⇒0名
(5)大豆+主食用米 ……1名	⇒⇒⇒0名	(11)国が高く買う ……1名	⇒⇒⇒0名
(6)大豆+主食用米+飼料米 ……………0名	⇒⇒⇒2名	(12)分からない ……3名	⇒⇒⇒1名
		(13)選べない ……………0名	⇒⇒⇒1名 (自分が良い)

「市民」部会では、「社会的価値判断力や意思決定力の学習過程」の「二次的な判断をする」場面の「形成的評価」の指標を以下のように定めた。①条件や優先順位などの観点を加味して考えているか。②他者の視点をもととしてしているか。③自分とは違う意見の良さにも気がついているかと。(『社会的価値判断力や意思決定力を育む「市民」の学習』(2010年)P.204-205より引用)

第一意思決定場面では、4人しかいなかった「大豆+飼料用米」が、第二次意思決定では16名にまで増えた。子どもたちは討論を通して米の生産者の「大豆畑から水田に戻したときは、米の生産量が増えるんだ」と、いう情報を思いだし、飼料用米でも主食用米でも、米には変わらないということに気づき始め、これを、決定の根拠となる情報の一つにして第二次意思決定を行ったのである。

(1) 成果

この事例から、形成的評価の指標に照会すると、「②他者の視点をもと」、「③自分とは違う意見の良さにも気がつく」ことができている子どもたちの学ぶ姿が浮かび上がる。ここから、「社会的価値判断や意思決定の学習過程」が効果的に働いていることが分かる。

また、今年度から「市民」の学習のタイプを、その内容と場面設定から、タイプ①「時事的な社会事象について、他者との差異や葛藤を感じる問題」を扱う内容、タイプ②子どもが社会的な事象を選択しながら「他者との差異や葛藤を感じる問題」を扱う内容、タイプ③子どもがプランや提案を創造しながら「他者との差異を認め広げる」ことが可能な内容、と類型化することができた。

(2) 課題

タイプ①では、「公」と「私」のせめぎ合いである「公共圏」を積極的に取り上げ社会的ジレンマを感じる学習が可能である。今後ここに重点化して開発を行う。それが「社会を見る3つの目」の涵養につながるからだ。5年生の事例「食料生産と私たちの生活」では、「手つかず食品を減らすためには、法律で罰金、個人で頑張る、コンビニのリサイクル弁当を買う、フードバンクに協力するという案がでてきたが、正直これだ！と思うものがでなかった。モヤモヤしている。減らしたい！思いはあるが、発想が出にくい」という子どもからの意見が多く出た。「社会を見る3つの目」を持ち始めているのがわかるが、「形成的評価の指標」が、確立していない。その作成こそ、今後の第一の課題であろう。

(1) 成果

算数部では育てたい「公共性リテラシー」を5つの項目に分けてあげた。以下各項目について成果を述べる。

アの「課題を持ち解決に取り組む姿勢」については、問題を個人で解決する場面で一人一人が何らかの結果を出そうと熱心に取り組んでいる様子から見て、概ね達成できていると考える。しかし、解決が困難そうである場合に何とかして解決の方策を見いだすことや、自分から課題を見つけようとすることにたいしてはまだ十分に育っているとはいえない。

イの「友だちに分かりやすく伝える力」については、自分の意見を発言しようとする意欲は低・中学年に強く見られ、沢山話したり書いたりする経験を積んでいると考えられる。その結果、高学年においては表現方法として図や式を有効に用いる場面が増え、この面でも育ちが見られた。しかし、高学年になると発言しない子ども増え、この子どもたちが自分の考えを表現する場を設けることの必要性も感じられた。

ウの「友だちの考えを理解する力」「自分の考えとの類似・相違を明確にする力」については、発達段階に応じて「違い」に気づく様子が見られた。それは友だちの考えを理解し、自分と比較している結果であろうと判断できるので、その面において成果と認められる。「違い」の質までとらえ、且つ、自分も他者も尊重することについてはもう少し育てていきたい。

エの「課題場面に適した方法を判断する力」は課題場面の理解にも依存することから、低学年ではなかなか難しいが、学年が進むに従い、ある解決方法を次の課題の解決に用いる様子も見られたことから、子どもなりに判断していると思われる。自分の考えを大切にすることと条件に合わせてより良い方法を用いることとのバランスが大切だが、この点については、まだ個人差が見られる。

オの「新たな課題を見つける力」については、課題を見いだしやすい場面では発揮できているが、学習全体を通してみると、まだ不十分である。

(2) 課題

上記のように各項目について今後改善していかなければならない点がある。大きくまとめると、

- 発言しない子どもの思考の様相
- 友だちの考えを尊重することと自分の考えを堅持することのバランス
- 新たな課題を自ら見つけようとする姿勢と力

の3点が来年度以降に検討したり、育てたりしたい事柄である。

そのために、まず、子どもが自分の考えを表現する力をつけていくための指導方法や課題の設定、授業構成を考え、発達段階に応じて自分の考えを表現する力の目安を明らかにしていきたい。さらに、友だちの考えや検討された考えを踏まえた上で、自分の考えをしっかりとつよくなる子どもを育てるための授業のあり方については今後十分に考えていかなければならない。新たな課題を自ら見つけるためには最初の課題の質と、授業の展開が大きく関係しているので、その点について整理し、より良い方向を探る必要がある。

全体を通して、「公共性リテラシー」を発達段階に応じて具体化していくことも来年度以降の大きな課題である。

(1) 成果

自然部で掲げた、育みたい公共性リテラシー最重点項目は、「自分の意見や予想をしっかりと持ち、検証方法や実験・観察方法を話し合い、友だちの考えを聞こうとする態度。」という点である。実際の授業の中で考えを発展させていく過程においては、他者と関わり合い、影響し合いながらより良い考えへと高め合うような授業を通して、子どもたちの「公共性リテラシー」が育まれていくと考えた。具体的には次のような過程があるのではないかと仮説を掲げるに至った。

1. 自分の考えをもつ
2. 自分の考えを発表する
3. 友だちの意見を聴く
4. 友だちの意見と自分の考えを折り合わせる
5. 他者の意見を分析したり、批判したりする
6. 全体で、考えを高め合う

更に「公共性リテラシー」の観点から見た、学習活動の成果をあげる為に、以下のように発達段階ごとに指導のポイントを絞り、実際の授業の場で意識的に実践に反映させる手法をとった。

- 1・2年生 [話す]; 自分の考えをしっかりと持ち、それをみんなの前で話す
- 3・4年生 [聴く]; 友だちの意見をしっかりと聴き、自分の考えとの類似点や相違点に気づく
- 5・6年生 [高め合う]; 他者の意見もしっかりと聴いたうえで、それを分析したり、批評しながら、互いに高めあい、より高次の考えへと発展させていく

3年生以上の到達目標として「友だちの意見をよく聴く」と掲げた。本校の児童の特徴でもあるが、自分の意見は良く発表するが、反面他者の意見を聞くのは苦手である。そこで、クラス全体の場よりも、小グループでの意見交換をする場面を多く設定し、グループ内で実験方法や結果からの考察をよく練り、互いに聴きあう場面を多く設定することによって、ある程度の成果をあげたように思う。

(2) 課題

「公共性育成」を重点に研究を続けたが、いくつかの課題（問題点）もはっきりしてきた。

① 「公共性育成」と「事実から学ぶこと」の重点の置き方の問題

自然学習の最重要目標であり、科学教育の基本理念である、「事実から学ぶ」ということ、「公共性の育成」という研究重点課題のバランスをどのようにとっていくか、ということである。これは、研究推進上の問題点であるばかりでなく、日頃の自然の授業の中でも、指導者の立場として、強く感じることである。確かに「公共性の育成」は大切であるが、科学教育の大綱的な目標ではない。ここに重点を置きすぎると、科学教育の一番大切な部分が、軽視されてしまう恐れがあり、実際に子ども達の変容から実践者自身がその傾向を感じることもある。これは、公開研究会に参加した、他校の教師からの意見でも強く読み取れ、一種のジレンマのようなものを感じる部分である。3年次の実践研究では、このバランスをどうとるかを、年度当初からよく話し合っていきたい。

② 「自然」という学習分野と「公共性」がもともと融和しにくいのではないかと問題

2年間の「公共性育成」を重点に置いた研究を推進する過程で、さまざまな研究関連文書を書く機会があったが、とにかく自然部のものは書きにくい、という実感を持っている。他の学習分野では、「公共性育成」そのものが、分野や単元の目標の基軸に成り得るものがある。しかし自然の場合、言い方は古い「内容教科」的な色彩が強く、その指導手法も徹底的に「事実から学ばせる」ことにある。こうした学習分野の特性と、「公共性育成」という研究全体目標が、もともと融和しにくく、授業実践という一つの舞台の中で、子ども達の姿として見取ることが非常に難しいと感じている。3年次はこの点についても打開してゆきたいと考えている。

音楽部では次の4点を「公共性リテラシー」として掲げ、学習方法や場、学習材の工夫を重ねた。

- ① 必要な道具を用いて「私」を表現しようとする
- ② 「異なる他者」の表現を味わう
- ③ 他者とともに音楽表現を生み出そうとする
- ④ 自らの学習を設計し、自律的に活動する

(1) 成果

低学年のわらべうたあそびの中で、2年のM子はクラス替えした4月当初は、ぶいっと輪からはずれていた。しかし、周りの子どもたちがあたたかく何度も声をかけたことや、クラスの様子がわかってきて少しずつ友だちと関わっていったことで、徐々にあそびの輪に加わるようになった。共感（安心・心地よさ）が彼女の身体を柔らかくし、仲間と関わっていく表現行動（①や③）を生み出した。また、「わらべうた」という学習材が効果的に関与したと言えよう。M子だけでなく、彼女にはたらきかけた子どもたちにも「公共性」の芽が育っていると捉えられる例である。

高学年では、「ミュージックプランに基づく学習」に日常的に取り組み、②や④の育成に効果的であることが、これまでの実践や、この実践を取り入れた他校での報告からも明らかになった。リコーダーがお気に入りだが、じっくり取り組むことが苦手な5年のU男は、ある日アニメ曲をピアノで弾きたいと自分から相談にきた。1学期中その曲を練習し、やがてその成果を発表した。やりきって満足そうなU男はその後、左手も入れて引き続き練習を続けた。自らのこだわりで没頭して主体的に学び（④）音楽的な技術を身につけていった例であり、多様な手段を用いて自らの選んだ音楽を楽しむ「異なる他者」の姿に触発された（②）行動と評価することもできよう。6年生では、より音楽的に内容と技術を高めようと導入した『カノン』（ソプラノ・アルト・テナーリコーダー）の合奏で発見があった。息を合わせ、他者の音を聴き合ったり、技術に自信のない子は得意な子の傍に寄り添ったりして、身体を委ねて（他者の身体を借りて）演奏を楽しむ姿があったのである。これは他者とともに一体となって、音楽の中に身を置き、信頼を寄せ合って学び合う姿であり、音楽という授業の特性として育つ「公共性」といえるのではないかという声が、校内授業研究会で他教科の教師たちから多く寄せられた。

また、全国の先生方に向けた公開研究会では、「同じ取り組みをして子どもが確かに変わった」や、「音楽を通して人間を育てている」「長いスパンで子どもをみている」という評価をいただいた。また、「教室空間があたたかく、居心地のよさを感じた」「教師が指導要領に縛られすぎて忘れていた、音楽の持つ本来のよさを思い出した」などの意見もあり、教師としての大人の姿勢が「公共性」育成に大きく関わるのだという点で、共通の理解を得た。

(2) 課題

① 「表現」とはなにか。

解放と抑制、調和と独自性、多様な広がり一体感。音楽と関わる様々な表現行動をどのようにみとるかで、評価は全く異なるのであり、そこには「公共性」をどのように捉えるかという教師の哲学がそのまま表れる。学習指導要領還元主義に陥らず、自らの言語で授業の事実を振り返り、教師や異種の職業の人々と語り合うことで、より多様な視点から子どもの表現を受け止め、「公共性リテラシー」を考える手がかりとなるのではないだろうか。

② 子どもの変容をどのようにうけとめるか。

「めあて」と「評価」については多くの意見をいただいた。全員が同じめあてのこともあれば、個別に異なる場合もある。評価する対象も、演奏の是非や記述の良し悪しだけではない。1時間の授業のみとりとともに、長い目で、一人の子どもが「何ができるようになっていくのか」の変容をみていく姿勢が重要である。教師も子どもも身体で感じている非言語の変容、評価をどのように意味づけていくか。音楽ならではの独自性を生かして考えていきたい。

(1) 成果

アートで大切にしたいことが何なのか、わかってきたように思う。かけがえのない「私」と向き合い、表現する。そこでは自己内対話が生じる。自己内対話の質を高めることにより、表現は充実したものとなる。「私」が「本来の私」らしくあること、「私」を表現していくことの心地よさに気づくこと。そこを目指すことが、まずは大切である。自己内対話の質を見取することは簡単ではないかもしれない。表現のあとに感想文を書いたり、友達と相互に作品を批評しあったりするという活動は授業の中で、しばしば行われている。それも評価の方法としては有効であるが、究極的には、「私」を本当に理解しているのは「私」だけであろう。どのくらい活動に埋没できたか、どのような気持ちになったかは「私」だけが感じる場所であろう。

「私」という存在と向き合うことが、第一段階だとしたら、回りに気づくことが次のステップだろう。そこでは、様々な公共性リテラシーを育む場面が出没するだろう。「私」を深く感じるアンテナが育てば、他の良さにも気づくことが出来る。この場合の関係性とは、人と人の間だけではなくモノやコト、場や空間にも及ぶことが、この学習分野の特性である。

アートにおける公共性リテラシーとは、「おつきあいスキル」を獲得することというのが現段階での結論である。様々なアートの活動の中で「おつきあいスキル」を育てていくことが可能である。ただ、「おつきあいスキル」というのを単なる社交術のように狭く捉えてはいけないということを確認しておきたい。

(2) 課題

本校では、どの学習にも共通する「公共性リテラシー」の要素として、共感・賞賛・批判・提案を挙げている。これらは対人関係において発揮されるものと捉えているが、アートの表現活動では、「私」らしさを求める際に自己内対話として欠かせない要素といえるのではないか。自他の行為や表現のあり方に心惹かれる「共感」。よさを見出す「賞賛」。何かが違う、違和感をもとに考え直す「批判」。納得のいくように作りかえていく「提案」。これは、創意工夫における“試行錯誤”とも言い換えることができよう。共感・賞賛・批判・提案を含む自己内対話の過程で、「私」自身に深く向き合える子どもは、他者との関係においても、望ましい「公共性リテラシー」を発揮できるのではないか。それが、アートの学習において育みたい「おつきあいスキル」ともいえる。

「おつきあいスキル」には大きくわけて二つの方向性がある。自己に向き合う求心的な方向と、周囲に向けてアートを通した提案を行っていく方向である。一概に、ファインアートかデザインかと捉えるには早計であるので、この二者を公共性を育むうえでどのように位置づけて、それぞれの方向性の中で、どのような学習を展開していくべきか、今後の検証課題である。また、学年の実態に応じて柔軟に対応していくべきことと、成長に従って確実に定着させていきたいもの見極めも重要な点である。

さらに、助言者からは「友だちと自分との違いを排除せずに…」というニュアンスを「友だちと自分との違いを楽しめること」を、アートは大事にできるという示唆をいただいた。今後の研究の基盤にしたい。

(1) 成果

今年度、生活文化部では、社会との関わりを考えながら主体的な生活をつくり、未来を担うことのできる自立した生活者を育てる、との目標の下に学習を進めてきた。ものと情報にあふれた現代において主体的に生活を送るためには、世の中の支配的な価値や宣伝に流されることなくその背景を読み解こうとする力や、まわりの人と共感的に関わりながら作業をしていこうとする意欲が必要である。

そこで、本学習分野で育みたい「公共性リテラシー」を、自分の生活を主体的につくりあげようとする意欲と実践的能力、友だちと共感的に関わりながら作業を進めていこうとする力、生活の背景を読み解く力とその解決策を探ろうとする力の3点とし、授業実践では自分のアイディアを持ちながら友だちの考えのよさを認め、対立や葛藤を乗り越えつつ建設的な対話を重ねて皆でひとつの方針を打ち出していこうとする話し合いの場を設定することで、「公共性リテラシー」を育てたいと考えた。

12月の授業実践においては、クラス全体でのプレゼンテーションの場で活発な質疑が行われ、友だちの考えを理解しようとする姿、同じ方向性を持って話し合いを進めようとする姿、短時間に自分たちの考えを人に伝えることの難しさを感じる子どもの姿が見てとれた。

プレゼンテーションに至るまでの学習の過程においては、グループでの話し合いの流れが教師に確認できるようにワークシートを作成した。ワークシートの記述内容によって、自分のアイディアを持った上で話し合いに臨んでいるか、同じグループの友だちの考えを理解し、よさや改善点を見出しているか、それぞれの考えの違いを共有した上でどのように話し合いを調整していったか、などの観点でグループの話し合いの様子を把握できたことは成果といえる。

(2) 課題

12月の授業実践では、消しゴムの開発シュミレーションを通して、ふだん消費者として生活している子どもたちにももの作り手の立場に立って考えさせる、2月の公開研究会では、いつも食事を作ってくれる家の方におかずを作ってみようや投げかけるなど、違う立場に立ってものを考えたり行動したりする経験をさせたいと考えた。決まった方向からばかりものを見てみると、思考が滞り、客観的に自分の生活を見つめ直すことができなくなってしまう。その結果、課題を見出す感覚や行動を起こそうとする意欲が鈍ってしまうように思うからである。

しかし今回の単元の進め方では、この「立場の転換の発想」は子どもたちに伝わりづらく、特に消費者教育としての着地点が不明確に終わったのは課題である。学習分野別協議会においても、生産者、消費者に製造者を加えた3者の視点でものを考えることの意味が話題に上り、現実の生活の中では、生産者であって消費者でもある、といったことは当然起こりうるわけで、両者の立場は対立しているわけではない、というご意見や、実際に作ることでできる教材（たとえばゼリー作り、ジュース作りなど）であればもっと実感の伴った学習が展開できたのではないかとのご提案をいただいた。一方、今回の授業実践においては「公共性リテラシー」を育てるために、主に4人グループでの学習の場を設定したが、はたして学び合いの場としてふさわしいメンバー構成になっていたのか疑問である、とのご指摘もいただいた。グループのメンバーをどのように構成するのか、本来なら育てたい力に合わせて教師側がきちんと手を入れていく必要があるのだが、そこまで踏み込むことができていなかった。

また、生活に根ざして学ぶ生活文化の学習においては、グループを構成するひとりひとりの子どもの生活の背景が異なることが特に大事になる。たとえば生産者として思い描くよさについて、どれが一番思い入れがあるのか、それは子どもによって異なる。工夫や創造性はどの班にもみられたが、そこに「どうしてそのようにしたのか」という思いも表現させることができれば、さらに学習が深まったと思う。今後の研究に生かしていきたい。

(1) 成果

◎ 感触や感覚など「自分のからだで感じる体験」を大切にする

幼児期からの連続性を重視し、小学校を卒業するまでの間に様々な感覚を自覚的に体験させることをねらった単元を構成している。例えば、竹馬や一輪車のようなバランス感覚、床やマット、鉄棒などで回転する感覚、トランポリンのように浮遊する感覚などである。育成プランでは「浮く・泳ぐ運動」において「水中での運動を楽しく行う」ことの意味を、水の感触に親しむとともに、水を感じるという感覚そのものを楽しむことも含めたものと拡大して捉え実践している。

◎ 「友達との関わりあい」を重視する

例えば、マラソンの練習を行う際に「駅伝方式」を採り入れるなど、個人の運動能力を高めることが求められる「体づくり運動」や「器械運動」、「浮く・泳ぐ運動」「走・跳の運動」のような学習内容においても、お互いに教えあったり、補助しあったりする必然性のある場面を多く設け、友達と励まし合い、協力を体感しながら練習できるように努めた。また、「ゲーム」においては、協力してプレーする必要性の高い種目をニュースポーツからも積極的に採り入れた。「カバディ」では、友だちと直接ふれ合いながらプレーする中で、相手の体や力を感じ、自分の体や動きをコントロールしようとする様子が見られるようになった。

◎ 「その運動をすることの意味や価値」を考えさせる

運動面と合わせて、保健では「自分や周りの人の体や心は個々に違っていることを感じる」とともに、そのような「仲間との出会いや活動を楽しむ」ことをメンタル面から指導し、仲間と関わり合う運動で何を身につけることができるのか、というメタ認知的な働きかけも意識的に行った。

◎ 「運動を楽しむ」自主性や創造性を育む

生涯にわたって創造的に運動を楽しもうとする子どもを育てるために、楽しくゲームを行う上で求められる動きのポイントや練習の仕方を知り、自分の力に応じた目標を立てることや、チームのメンバーに応じた簡単な作戦を立てることも大切な要素と捉えた。「INDOOR 雪合戦」では既習の運動を生かしながら、ルールやチームにあった作戦や分担を考えつつ学習に取り組む姿が見られた。

このように、学ぶことで向上していく自らの姿に気づくことから生じた自己肯定観や、自分は自分なりの目標をもって取り組めばよいのだといった安心感は、自らとは異なる他者（友だち）の良さを素直に認めることへと繋がり広がっていくと捉えられた。

(2) 課題

大学の体育では運動経験の二極化が問題になっていると聞いた。サーブをしても誰も拾わず、サーブの応酬だけでゲームが終わってしまうバレーボール。チームとして成り立たない集団。それまでの、体を通しての経験の不足が考えられるという。生涯を通して創造的に運動を楽しもうとする大人に通じる基礎を育んでいる小学校段階の重要性を改めて思う。

そのために、子どもたちの実態に応じつつ、「誰とでもすぐ一緒に仲良く楽しく活動できること」「楽しく周りに配慮ができること」という公共性のもつ意味の認識に基づいて、指導する立場からの働きかけを明確にしなが、実践を深めていく必要があると考えている。

(1) 成果

からだ（保健）では、運動領域と保健領域を切り離すのではなく、体や健康についての理解は運動と深く関わっていると考え、育てたい「公共性リテラシー」を3つ挙げた。各々について、今年度の実践から成果として考えていることを述べる。

① 自分の体や健康について理解を深め健康な心身を育もうとする意欲

授業中の子どもの様子や発言内容を見ると、自分の体や健康に関する学習への興味や関心は高いと受け取れる。「体づくり運動」と連携して、心臓を教材とした学習を行った。心臓の働きを知り、聴診器で自分や仲間の心拍を聞き合った。この学習はその後、からだの学習で運動した後の心拍数を測る活動につながった。しかし、学習で得られた知識を日常の生活で生かし、自分たちの心身を健康に育むという意欲については十分に育っているとは言えない。

② 仲間とコミュニケーションを図る能力

コミュニケーション能力については、保健の授業スタイルを一方向的な知識伝達型の授業ではなく、考えを言い合えるような学習活動の流れを工夫する、自分の考えを交流できる場として話し合いができるグループ活動を取り入れた。その結果、今まで発言しない子どもも自分の考えを言うことができた。6年のタバコを題材とした学習では喫煙に対する考え「個人の自由」「人に迷惑をかけないならば、タバコを吸って自分が早く死ぬのは本人の勝手である」など、他の子どもの考えにも触れることができたが仲間の考えを聞くに留まってしまった。スタイルとして双方向にもっていく必要がある。

③ 仲間と関わり合うことを通して他者の体への理解を広げ、互いの良さを生かしあう判断力・認識力

この力を育むための方法としては、②のコミュニケーション能力を育む方法と重なる部分が多く、関わり合う場の設定が重要である。

今回公開した授業では骨を題材とし、運動が骨を強くするという事を知るねらいがあった。授業中、「みんなで運動するのは、友だちの骨も強くするんだね。運動は自分のためにもなるし、みんなのためにもなるんだ」という子どもの声がきかれた。このことは、一つの成果と考えている。

(2) 課題

保健の学習の中で「公共性リテラシー」を育むための方法として以下に課題を挙げる。

○ 仲間と関わり合うための場の設定や課題の設定

時間数の少ない保健の授業でグループ活動を組み込むことは非常に難しいとことだと感じている。仲間の考えを聞くことで自分の考えを深めたり修正する過程を大切にするために、効果的な板書を工夫したい。また、課題の設定については、発問や指示など指導技術の工夫もまだ課題である。

○ 担任との連携

今年度の骨の授業ではからだ部の教員と連携できたが、学習の内容を生活の場面で生かせるように、担任と連携していきたい。

○ 計画的な授業時間の設定

今年度は授業時間の確保が難しく、「公共性リテラシー」を育むための研究的な視点から授業を十分できなかった。年度の初めに計画的な授業時間の設定を行っていきたい。

○ 「公共性育成プラン」の作成

今まで行った授業プログラムで、教具や学習の流れが同じであっても、今回の骨の学習のように「公共性」を切り口とした授業提案が可能であることから、今までの授業プランの見直しを行いたい。

(1) 成果

本教材<マゴタチワヤサシイコニ>は、野球の松井秀喜選手の食事法に着目して小学生用にアレンジ、「トップアスリートは健康生活の基盤を確かな食生活に置き、大きな成果をあげている」ということに気付かせ、自己の食管理能力を高めるという動機付けをねらったものである。給食時間を利用して使用食材の分類をしたり、不足分をどのように補うかの学習を日々繰り返している。料理や食品に対して一定の理解が深まったところで、子ども自身が献立を作成する時間を設けた。実際の給食に登場させるというリアルな体験を通して「食」に対する一層の興味、関心を喚起したり、献立作成の技術力を体得させたいと考えている。

本授業では、1時間目に、①主食・主菜・副菜が揃い、②<マゴタチワヤサシイコニ>の全食品が網羅されたものであることを基本条件とし、③できれば和食・洋食・中華の枠を大幅に外すことなく、④季節感にも触れた献立を完成させるという手順を示した中で、各4人ずつの10ファミリーが10種の献立案を作り上げるまでを設定した。

一つの料理名が決まると使用食材をチェックし、空欄を埋めながら次の料理に移る。ネーミングにこだわり、旬を意識し、いずれのファミリーも時間内に一つの献立としてまとめることができた。主食・主菜・副菜・デザート・牛乳の欄を模式化してあるシートに書き入れることで、3年生という発達段階の子どもたちにも比較的容易に取り組めたようである。また実際の給食に使用される献立作りという点で、全体的なモチベーションは高かったのではないかと考えられる。

2時間目の授業は、前時に作成した10種の献立の中から予め選んでおいた3つを、1つに絞込み、クラス代表を決めるというものである。初めに、選ばれなかった7つについてはその理由を簡単に説明したため一応の納得を見たようで、その後は「1つに絞る」授業に向けスムーズに切り替えができた。実際の給食に使うという前提、目的があるため、楽しさとともに責任感も生じたはずである。集中度も高い。選ばれた3つのファミリーが作成意図や作成過程で工夫した点などを発表すると、最初は批判意見もあったが、ネーミングの面白さや旬に拘った食材の使い方には共感も見られた。率直な賞賛はなかったが、自分たちが考え得なかった意外性の部分に対しては、認めることができたのではないかと考えられる。話し合いが深まるにつれ、同じ食材が他の料理と重なったりするところや野菜不足の献立に対しては、どのような食品を補ったらよいか、活発な提案が出された。途中、食材費にも触れる場面や「旬」というものを改めて考えたりと想定を超えた授業展開となったが、最後に挙手で、圧倒的な支持を得て一つを決めることができた。

(2) 課題

3年生での献立作成は、むずかしいのではないかと心配もある。しかしその前段階として<マゴタチワヤサシイコニ>の学習を給食時に繰り返し、食品や料理に対する知識の蓄積があるためか子どもたちは楽にステップを越える。1、2年生でも可能だ。食品レベルの使用をチェックしながら、主食・主菜・副菜といった料理レベルでその構成を組み立てるという作業で、概ね良好な献立になることはこれまでの実践からも証明できている。

本校ではまだ緒についたばかりで学年も限られているが、この教材を全クラスに整え、全校一斉に展開できるようにしたい。また、この指導を深める中で、今後は発達段階をどう考慮するか、他教科との連携をいかにするか、評価をどうするかなどについても整備していかなければならないと考えている。